実践報告

「応用演習・演習Ⅱ／Ⅲ／Ⅳ」

舘岡　洋子・池上　摩希子・小林　ミナ

要　旨

2020年度春学期は「応用演習・演習Ⅱ／Ⅲ／Ⅳ」もオンラインで実施された。他の科目と多少異なっている点があるとすれば、この演習には新入生がおらず修士２期目以降の学生で構成されていることである[1]。そのため、お互いにある程度の関係性が構築されたコミュニティにおけるオンライン授業であったといえる。実際の演習では、従来通り発表をしたり意見交換をしたりといった活動が行われた。しかし、「わちゃわちゃ感」と表したメンバー同士の非公式的、同時的な発話の機会がもちにくかったことによるやりにくさ、混沌の中から新たなものが生まれてきにくい感じはあった。本稿では３名の教員の誌上鼎談という形で演習を振り返る。

キーワード

演習　同期型　「わちゃわちゃ感」　サブストリーム

１．はじめに

2020年度春学期は、日本語教育研究科では他の授業科目と同様、研究室ごとに行う「応用演習・演習Ⅱ／Ⅲ／Ⅳ」（以下、「演習」）[2]もオンライン化することとなった。各研究室で今までの流れを汲みつつ新たな展開があったものと思われる。そこで、本特集の企画者３名がそれぞれの研究室の「演習」がどのようにオンライン化されたのか、そこでどんな工夫があり何が課題となったのかを誌上鼎談の形で掲載する。

本稿はあらかじめ決めておいた論点にしたがって、三者三様に実態を報告しつつ今回のオンラインでの「演習」を振り返る。いずれもZoomを用いた同期型オンライン授業である。研究室の教員がZoomのホストを務め、学生たちが共同ホストになり資料をZoomで「画面共有」しながら発表や質疑応答を行うというスタイルである。修士論文の検討を主たる活動とするが研究室によって進め方やほかの活動の取り入れ方は多少異なる。次節以降では、各論点にしたがって、鼎談を進める。

２．誌上鼎談

2.1　演習の枠組み―「メンバーは？主な内容は？」

舘岡：舘岡研は修士のメンバーが自身の研究計画や研究の進捗状況、困っていること、悩んでいることなどについて発表しみんなで討論します。１人40分という時間枠があり

ます。以前は博士もいっしょにやっていましたが、今学期は、博士ゼミは木曜日の午前に別に行いました。

池上：内容も進め方も舘岡ゼミと近いですね。文献講読の時間も取っていました。時間はそのときによりますが、基本１コマで２人発表、でも時間が足りないことが多かったですね。メンバーは、博士の学生が任意で参加することがありました。地方や海外在住の博士は任意の遠隔（Skype）での参加でした。これが今までの基本形です。

小林：うちの研究室も、修士だけでなく博士の学生も参加していました。これまでも海外在住の博士学生が遠隔（SkypeやZoom）で参加することがありましたが、それが全体に広がった感じです。「今週の日本語教育（30分）」「文献講読（40分）」「発表３人（40分ずつ）」という流れです。

2.2　オンライン化による変化―「意見を可視化する」「サブストリームが消失した」

舘岡：私のところでは事前に資料を共有し読んでからゼミに参加するというのは以前と同じなんですが、オンライン化してからは、互いの意見の可視化が進んだといえるかもしれません。発表者は火曜日までにGoogle ドライブに発表資料をアップしておき、木曜日４限のゼミ開始前までにお互いにコメントを記入しておきます。発表者は事前にコメントを読んでからゼミに参加し、ゼミ時間中にはコメントへの応答を中心に討論します。そのことで論点が事前に明確化されるようになったと思います。また、対面のときに口頭で行っていたコメントでは流れて行ってしまうことも、事前に記述したことで残るのはよいことだったと思います。記述といえば、議論の展開をZoomのチャットに発表者以外の人がメモするようにもなりました。こうして可視化して残しておくことで、後での個人の振り返りにも役立ちますね。

池上：資料提供の方法は変わっていないので、舘岡ゼミの工夫を見習ったほうがいいのかもしれないですね。とにかく、二次元でのコミュニケーションに慣れるまで時間がかかったように感じます。ターンが取りづらいとか視線が合わないとか、いろいろ。なので、ゼミで本来はかなり自由に行っていたやりとりが少し固くなった気がします。話している人の間だけのコミュニケーションになり、サイドでのやりとりが起こらない。それで、ゼミでの「討論」という感じが薄れているように感じています。

小林：池上さんが「二次元のコミュニケーション」について触れていますが、私がいちばん感じたのは「オンライン（デジタル）の遠隔コミュニケーションには、サブストリームがない。メインストリームしかない。」ということです。通常の教室でのゼミでは、「発表者⇄質問者」のやりとりが続いている最中であっても、隣に座っているゼミ仲間に「いまどこ読んでるの？」「これって、こういうこと？」と小声で尋ねるなど、メインのコミュニケーションと並行して、「他参加者のサブストリームのコミュニケーション」が行われるという、複層的な構造があったと思います。このようなサブストリームを「質疑応答を聞かずにおしゃべりしている」といったネガティブにとらえる見方もありますが、私はむしろ、個々人の学びの質に非常に貢献していると考えています。このような「サブストリーム」「わちゃわちゃ感」がなくなったことが、オンライン化のもっとも大きな痛手に思いました。

池上：ああ、この「メインストリーム」「サブストリーム」、そうです、これが言いたかった、この表現がいいと思います。日本語の授業でも実践研究の活動でも同様で、この層での学びは大切ですよね、なのに、なくなったのは痛手と言ってもいいぐらい。

舘岡：それ、私が「実践研究」のほうでも書いたことです。「サイド発話」ということばで。「サイド発話」は文野さんのことばです[3]。実践研究の対象フィールドの授業でサイド発話がなくなったのがコミュニティ形成に大きな影響があった、と。これはかなり顕著でした。ゼミでも同様ですね。授業中のそういう私語、サイド発話、サブストリームと同様に、授業後、教室に残ってこれといった目的なく話すのがなくなった、というのも大きいと思います。なにしろ、「じゃ、終わりましょうか」と言ってホストが「退出」ボタンを押してしまえば、そこで全員がバラバラになるんですから。この残った人たちの中で、対面場面でしたら振り返りのような発話もあったと思います。発表学生のクールダウンの意味もあったでしょうし。

小林：メインではない活動については、教室活動ではなくコミュニケーション一般についてですが、高梨さん[4]が「付随的活動」ということばで取りあげていますね。もう１つ、オンラインだからこそできたことに「日本語教育小委員会の傍聴」があります。演習と同じ時間帯（６月25日（木）14－16時）に「文化審議会国語分科会日本語教育小委員会」が開催されたのですが、この状況でしたので委員会自体も傍聴もオンラインでした。そこで、ゼミメンバーそれぞれが申込み、全員で傍聴をしました。小委員会の開催にはZoom、傍聴にはWebexが使用され、「傍聴者はカメラもマイクもオフで参加」というツールの使い分けがありましたので、私たちはWebexで会議を傍聴しつつ、同時にゼミではZoomでつながって、意見交換をしたり、関連情報や資料を検索してチャット機能で共有したりしました。仮に霞ヶ関に足を運んで傍聴していたとしたら（そもそも傍聴自体が院生、とくに留学生にはハードルが高い）、傍聴席で意見交換をしたり、関連情報を検索したりはできません。オンラインだからこそ実現できた貴重な機会だったと言えます。

池上：こういう活動、是非、私のゼミでもやってみたい。オンラインだからの多様性。

舘岡：すごいですね。これこそ「生の」日本語教育学？！ところで、この参加はゼミの予定に前から入っていたんですか。舘岡研は学期初めに１学期分の発表スケジュールを作っているので、あまりフレキシブルに動けていない気がします。チャンスを捉えて動けるといいですね。

小林：いえいえ、委員会開催の情報を得たのが１週間ほど前でしたから、急いでゼミのスケジュールを調整しました。

2.3　オンライン化における工夫―「サブストリームの代行としてチャットを利用する」

舘岡：工夫としては、2.2で話したことと重複しますけれど、なるべく可視化するようになったというのがあげられるかなと思います。学生もお互いのコメントをチャットに書くなどして文字に残すようになったし、だれかの発言や質問を議事録みたいにチャットにメモしてくれる人もでてきました。それから、チャットには文献の紹介やいろいろなリンクも記載できたのでそういう点は便利でしたね。

池上：ちょっと考えましたが…あんまりやれていないみたい。自分も含めてみんな「慣れる」ことに注力していたと思います。話し手に意識を集中させると、他の人がどんな様子なのかどんな反応をしているのかがわからなくなりませんか。でも、なんとか周辺の情報を得ようとして疲れてしまって、対面時より集中できる時間が短くなる。なので、ゼミ全体の時間を対面時より小さい単位に切っています。休憩時間が大切な時間。

小林：メインストリームを邪魔しないような、小声のサブストリームの代替と言えるかもしれませんが、音声のやりとりと並行してチャットを使うようになりました。確認したいことを書き込むと、誰かがそれに答えたり、私が補足情報や関連サイトを流したり、音声コミュニケーションと文字コミュニケーションを併用することで、複層的な構造を取り戻そうとしていたように思います。

池上：それから、敢えて、ある時間、「センセイ」がZoom空間から外れたりもしています。そうすると学生たちは「わちゃわちゃ」できるみたい。これも複層性の取り戻しかな、複層性の創出、サブストリーム・タイムの捻出、そんな工夫でしょうか。

舘岡：そうね、先生が外れるのも必要ですね。上記の授業後に教室になんとなく残ってみんなで振り返りをするのと同じ「効果」でしょうかね。

2.4　オンライン継続に伴う工夫―「どんな目的でどんなツールを使うのか」

舘岡：オンラインが続くとしたら、どのように重なりをつくれるか、ツール利用の可能性も学びながら工夫していきたいと思っていますが、どんな方向に工夫を重ねていきたいですか。

池上：ここで話し合えたことを直に参考にしたいです。舘岡ゼミの資料提供の方法が実際に役立つと思いました。また、時間の使い方を含めて「多層性」を作り出せるといいと考えています。メンバーの配置、話す内容、資料などの媒介物も同様に工夫できますね。

小林：音声コミュニケーションと文字コミュニケーションの併用など、複層的な構造を担保する仕掛けをさらに工夫したいです。

池上：小林ゼミの「傍聴」も取り入れたいです、「複層」「多層」化に向けて。

舘岡：そうですね。複層と多層。Zoomを始めとするITのさまざまな道具は、道具にすぎないんだけど、その道具によって活動が規定される面もありますよね。だから、どんな目的でどんな道具を使っているのか、いろいろな先生方の実践の工夫も聞きたいです。

2.5　対面に移行しても生かせる工夫―「熟考のために記録する」

舘岡：たとえば、前に述べた研究室の共有のドライブに事前にアップして、みんなでコメントするという「事前コメントシステム」は、その資料を自分のフォルダに入れてためていくことで、結果としてポートフォリオになりました。それは続けたいですね。

池上：そうした、「記録に残る」工夫を意識的に行えるといいと思います。今回のゼミでは実際には行いませんでしたが、Zoomの録画機能もそれに類似のものとして考えられる。

小林：質疑応答は、その場で消えてしまう音声コミュニケーションよりも、時間に制限されない文字コミュニケーションのほうが、手元に残るしあとあと熟考できるので、残したいなと思います。

3．おわりに：ゼミの機能と役割－オンラインでできること、できないこと

舘岡：やっぱりオンラインじゃ無理…というものもありますか。たとえば打ち上げとか。

池上：お菓子食べながらのおしゃべりとか、そういう状況で「わちゃわちゃ」しながら掬い上げられるもの・ことも多々あるけど、それは無理ですね、打ち上げ等の飲み会も同様かも。「私たち」としてそこにいるのに空間を共有していない、共有しているのは時間のみ。身体性がないコミュニケーションですよね。そもそも、オンラインによるコミュニケーションってなんだろう…と考える必要があります。良い悪いではなくて、機能としてどのようなものなのか、私たちはそれを使って何をしようとしているのか。

小林：「ゼミ」の機能や役割をどうとらえるかも関わりますね。「なぜわざわざ遠くまで出かけてゼミ合宿をするのか」という問いとも共通するように思います。「研究発表」という正式な時間以外が担う機能や役割かな。それはサブストリームとも共通するのだと思いますが、一緒に居る時間を増やし、「わちゃわちゃ」することで新しいアイデアが湧いてきたり、ブレイクスルーを引き起こしたりしますが、デジタルのオンラインでは、このようなことが起こりにくいように思うのです。ただそれは、私がアナログな環境で学び、訓練を受けてきたからなのかもしれません。「デジタルネイティブ」と呼ばれる人たちには、そのようなデジタル環境の特性など、易々と乗り越えてしまうのかも。

池上：このあたりは、デジタルネイティブの意見も聞いて取り入れてみたいですね。ゼミ自体が学生と一緒に作り上げるものですから。主体として関わってもらいたいです。

舘岡：たしかにデジタルイミグラントにはちょっと思いつかない世界があるかも。そういう意味では、ゼミのあり方ややり方もネイティブの学生たちに創ってもらうほうがいいですね。自分たちのゼミは何を大切にしているのかをお互いに確認、共有した上で、それを実現するにはどういうふうにしたらいいのか、といったことを学生たち自身に考え実現してもらう…きっと教員には思いつかないようなおもしろい展開があるんじゃないかと思います。

注

1　本研究科では、修士１学期目は研究室には所属せず、全新入生、全教員が合同で演習を行う。

2　本研究科では、2020年度４月にカリキュラムが改編された。移行期の現在は、１つの「演習」のなかに、「演習Ⅰの履修者」と「基礎演習の履修者、」「演習Ⅱ（Ⅲ、Ⅳ）の履修者」と「応用演習の履修者」がそれぞれ混在している。

3　文野峯子（2004）「授業参加過程の質的研究―「サイド発話」への注目」『日本語教育』121号、pp.103-108、日本語教育学会

4　高梨克也（2018）『シリーズ　フィールドインタラクション分析Ⅰ　多職種チームで展示をつくる　日本科学未来館『アナグラのうた』ができるまで』ひつじ書房

（たておか　ようこ　早稲田大学大学院日本語教育研究科）
（いけがみ　まきこ　早稲田大学大学院日本語教育研究科）
（こばやし　みな　早稲田大学大学院日本語教育研究科）